

報 告

リアリティを持たせる小児看護学内実習の授業設計と実践 —対象のイメージ化を図る—

Design and Practice of Pediatric Nursing In-School Practicum to Create Reality –Imaging the Pediatric Patient

遠藤 洋次*¹, 室谷 実愛*², 宗時千枝美*¹, 泊 祐子*³

要約：本研究では、2020年度からの2年間にA大学で実施した学内での小児看護学実習の構成内容について整理することで、成果及び課題を明らかにすることを目的とする。

2019年末からはじまったCOVID-19の影響により、A大学においても臨地での小児看護学実習が中止となり、2020年度と2021年度の2年間学内実習に切り替えることとなった。A大学の小児看護学実習は、患児の健康問題の理解、家族も含めた援助関係の理解などを目標とした医療施設実習と、子どもの成長発達や基本的な生活習慣の獲得の理解などを目標とした保育・教育関連施設実習を1週間ずつ組み合わせて構成している。

2020年度に学内実習となった際に、実習目標・目的に照らし合わせながら立案した。さらに2021年度は、2020年度の構成からより臨地に即した内容となるよう修正を行っている。

【医療施設実習】視聴覚教材の視聴や教育用電子カルテシステムなどを用いて看護過程を展開している。実践ではシナリオを使用した患児役・家族役をシミュレーターなどを用いて行うことにより患児・家族の反応を考慮する機会が確保出来た。また、小児特有の療養環境については学内実習で理解することに限界があった。今後は、学内の教育資源だけでなく、学内実習における実習施設との連携体制を検討する必要性が示唆された。

【保育・教育関連施設実習】2020年度は、実習構成を「成長・発達理解」「保育計画の立案」「保育計画の実施」「応急処置対応」「発達に課題のある子どもと親の理解」に5つに区分した。2021年度は、2020年度の実習構成に「保育所・幼稚園機能の理解」を追加し展開した。学生は、子どものイメージ化することに苦慮しているため臨地実習をイメージしやすいように学生の幼い頃の経験をもとにその時期の成長・発達の学習と結びつけるなどリアリティのもてる授業設計の工夫の必要性が示唆された。

Key Words：小児看護、学内実習、シミュレーション教育、事例演習

I. 研究の背景

2019年末からはじまったCOVID-19の世界的なパンデミックにより、社会全体が大きな影響を受け、医療現場では臨地実習を受け入れられない状況となった。臨地実習を十分に経験できない場合には、卒業後に求められる看護実践能力が十分に獲得できないことが危惧される。このような状況に対し、看護学教育質向上委員会による調査では、2020年9月以降の実習科目のうち、83.

4%の大学が変更を予定し、そのうち78.7%が学内への代替実習に変更を予定していた（一般社団法人日本看護系大学協議会、2020）。A大学の3年次に実施する小児看護学実習でも、同様の影響を受けたことにより、2020年度と2021年度の2年にわたり臨地実習が困難となり、学内実習に変更せざるを得ない場合が生じた。

A大学の小児看護学実習では、患児の健康問題の理解、適切な看護の実施、家族も含めた援助関係の理解などを目標とした医療施設実習と、子どもの成長発達や基本的な生活習慣の獲得の理解などを目標とした保育所・教育関連施設実習を1週間ずつ組み合わせて構成している。2020年度に学内実習となったときに、これらの目標を達成できるように、可能な限り臨場感のある小児看護の実際について、具体的な理解を促すことに焦点を置いた学内実習構成を検討・実施した。さらに2021年度はその構成

2022年11月15日受付／2023年1月11日受理

*¹ ENDO Yoji

MUNETOKI Chiemi
関西福祉大学 看護学部

*² MUROTANI Mie

山陽学園大学 看護学部 看護学科

*³ TOMARI Yuko

関西福祉大学 大学院 看護学研究科

からより臨地に近い内容へと修正を行い、学内実習を行った。そこで、本研究では、2020年度からの2年間で実施した学内での小児看護学実習の授業設計について整理することで成果及び課題を明らかにすることを目的とする。

II. 小児看護学実習の基本構成と学内実習構成プロセス

1. A大学における小児看護学実習の基本構成

小児看護学実習は2単位2週間であった。1単位(1週間)ずつ保育所や幼稚園、認定こども園・特別支援学校の保育・教育関連施設(以下、保育・教育関連施設)と、医療施設の実習を行なった。臨地での実習は月曜日～木曜日とし、金曜日は学内日としてまとめをした。学内日では、臨地での経験・学習について実習施設毎でのグループワークでまとめ、それぞれの場で実習をしている学生が全体で発表会をすることで、実習施設での学びを共有した。また、2週目の学内日では、保育・教育関連施設と医療施設の両方が終了した時点での学びのまとめ及び発表会を行うことで、小児看護学実習全体の学びの共有を行なった。

2. 2020年度の学内実習構成プロセス

学内実習の構成は、できる限り臨地での実習と同等の学習経験ができるようにすることを基本とした。受け持ち患児との関わりを通した看護実践やスタッフの実践見学など、臨地実習で経験する学びについて、学内で準備可能な教材を使用して代替する方法を研究者間で繰り返し検討を重ねた上、構成を決定した。また、学内で行うまとめは可能な限り、臨地実習が経験できたグループとも合同で行い、経験の共有ができることを考慮した。

3. 2021年度の学内実習構成プロセス

2020年度に行った学内実習および学内日での学びの共有について、対象となった学生80名に対してGoogleフォームを使用したWebアンケート調査を行い、その構成が効果的であったか評価を行った。2021年度に実施した学内実習の構成は、アンケート調査の結果を参考とし、継続すべき内容、修正する内容、追加する内容等を研究者間で精査し、構成を決定した。

III. 倫理的配慮

2020年度の小児看護学学内実習に関するアンケート調査の実施は、関西福祉大学看護学部倫理審査部会の承

認(第3-0611号)を得て実施した。対象者へ依頼を行う際、研究の目的・意義、研究方法および期間、対象者の選定理由、研究によって生じる負担と対応、成績判定は終了しており参加の有無による不利益はないこと、研究の同意および同意撤回の方法、情報開示、個人情報の保護、回答結果の保管および破棄方法、などを説明した。なお、研究への同意はアンケート調査の回答完了をもって得られたものとした。

IV. 学内実習構成及び実施内容

1. 2020年度および2021年度において学内実習となった学生数

2020年度の小児看護学実習において、医療施設実習が学内へ変更となった学生は7人、保育・教育関連施設実習が学内へ変更となった学生は38人、両方の実習が学内実習となった学生は33人であった。

2021年度に学内実習となった学生数は、医療施設実習では26人、保育・教育関連施設実習が学内へ変更となった学生は19人、両方の実習が学内実習となった学生は8人であった。

2. 医療施設実習の構成・実施状況

1) 2020年度の実習構成

小児看護学実習が学内実習になるに際し、表1に示した構成とした。実際の臨地での実習がどのようなものであるかイメージ化を図るため、「小児看護学実習 vol.2 小児病棟での実習の実際」(医学映像教育センター)を視聴することにした。これにより、実際の臨地実習で学生がどのように患児や指導者と関わって学習を進めているのか具体的なイメージを持てるように促した。

次に、実際の病院での患児に対してカルテ等からの情報収集やコミュニケーションを通して看護展開を行う段階の代替実習では、視聴覚教材を用いた看護過程の展開を行った。視聴覚教材には、小児の代表的な疾患の事例において、症状や治療とそれに伴う苦痛や、家族の様子など、看護をする上で重要なアセスメントの視点が含まれた看護場面が確認できるため、「小児看護のためのアセスメント事例集(医学映像教育センターの看護教育シリーズ全6巻)」の中から、A大学の実習施設で受け持つ可能性が高い疾患である川崎病と急性胃腸炎の事例DVDを選択した。

実習初日に事例DVDを視聴し、映像中に提示される患者情報、入院前の様子や、外来受診の場面、入院加療

表 1. 2020年度 医療施設の学内実習計画

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
概要	小児病棟・実習の 実感のイメージづくり	アセスメントと看護 計画の立案	看護計画の確定・看 護の実際	援助の準備と実施	学びの共有
午前	・オリエンテーション	・家族看護 CNS 講義	・事例に関する個人ワー ク	・実技演習のオリエン テーション	・まとめのオリエンテー ション
	・小児実習 DVD 視聴と 振り返り	・講義後の振り返り	・看護問題抽出	・実技演習 (実演の準備・練習)	・グループワーク (学びの共有)
	・事例の DVD 視聴		・看護計画の全体像・看 護問題発表・意見交換		
	・DVD からのアセスメン ト				
午後	・事例に関する個人ワー ク	・事例に関する個人ワー ク	・看護計画立案 (個別ワーク)	・実技演習 (実演の準備・練習)	・学びの発表会
	・アセスメント・全体像 把握	・アセスメント・全体像 把握			・個別面談
			・看護計画立案 (GW)	・担当以外の技術演習	

から退院までの場面に区分して看護過程の展開に必要な情報収集を行なった。それを元に、まずは学生個人で情報の整理・アセスメントを行い、関連図の作成から全体像の把握を行った。個人で患児の全体像を把握し看護問題を抽出した後、グループでの意見交換を実施した。学生同士の意見交換をもとに、再度個人で全体像及び看護問題の修正を行なった。

小児を対象とした看護技術について、臨地実習では受け持ち患児に日々行われている看護ケアや学生自身が立案した看護ケアの実践を通して経験を積んでいく。学内実習では、事例の看護過程で立案した看護計画をもとに、学内で実施可能な援助計画を立案し、場面及びシナリオを作成して実技演習を行なった。実施の際は看護師、患児、家族などの役割も学生自身が実施した。学生は午前中の半日をかけて、計画した実技の練習及び修正を行い、午後から各技術の実技演習発表会を行なった。発表後は、必ず学生同士で質疑応答・意見交換の時間を確保した。発表会終了後には、自身が実演した技術以外の技術について、学生同士で交流しながら実施した。学内で行なった技術演習の内容は、バイタルサイン測定、皮膚状態に注意した清拭、感染に配慮する必要のあるオムツ交換、シーネを使用した固定をされている末梢静脈輸液の刺入部固定テープ貼り替え、内服を嫌がる患児の内服支援であった。

学内実習では、困難となる学習経験には、患児本人との関わりだけでなく、その家族との関わりからの学びが挙げられる。この経験を補うために、家族看護専門看護師による講義を実施した。講義内容は、NICU での看護実践事例を中心に看護師の支援の方向性及びその後の経

過についてとすることで、小児看護における家族支援を考える機会を補った。また、臨地実習では、看護師からの指導や看護師によるケアの実践、連携などを見学し、学ぶことが可能となる。そこで、家族看護専門看護師からの講義後に質疑応答及び意見交換を行うことで、臨地の看護師からの学びを補った。

2) 2021 年度の実習構成

2020 年度の学内実習内容に対する学生へのアンケート調査の結果より、「自分の考えだけでなく周りの人の意見を聞くことで、小児の発達についてより理解することができた。」、「1つの技術に対して取り組んだため、その技術に対してはすごく理解が深まった」など、ディスカッションや時間をかけた技術演習を行うことで、概ね臨地実習と同等の学習経験を行うことができていた。しかし、「子ども役を学生同士でやるため、実際の子どもの反応を想像しにくかった」などの意見もあり、患児の状態及び学生の関わりに対する患児と家族の反応などをイメージすることは困難であった。そのため、2021 年度の学内実習は、より患者及び家族の反応や体調の変化を感じられるよう方法を考慮し、実習構成を表 2 のように修正した。

2021 年度の学内実習では、教育用電子カルテシステムである『Medi-EYE』(株式会社 Med-LX) を、新たに看護過程の展開に使用した。システム内で設定されている小児患者のうち、A 大学の小児看護学実習を行う医療施設で受け持つ可能性の高い疾患の患者データと、昨年度使用した事例 DVD 事例を参考に患者データを作成した。患児ごとに入院経過日数を学内実習の進行に合わせて毎日更新することで、実習初日に行う情報収集だけ

表 2. 2021年度 医療施設の学内実習計画

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
概要	小児病棟・実習の実感のイメージづくり	アセスメントと看護計画の立案	看護計画の確定・看護の実際	援助の準備と実施	学びの共有
午前	・オリエンテーション	・模擬患者カルテからの追加情報収集	・家族看護 CNS 講義	・実技演習	・実技演習の発表会
	・模擬患者カルテからの情報収集	・看護の方向性確認	・講義後の振り返り	(実演の準備・練習)	・小児看護学実習まとめのグループワーク
	・発達の DVD 視聴	・シナリオを用いたバイタルサイン測定、観察及び振り返り	・模擬患者カルテからの追加情報収集		
午後	・模擬患者カルテからの情報収集アセスメント	・援助計画の評価、修正	・受け持ち患児の全体像及び看護問題の発表	・実技演習	・学びの発表会
	・援助計画の方向性確認、立案	・シナリオを用いたバイタルサイン測定、観察及び振り返り	・実技演習オリエンテーションと計画立案 ・シナリオを用いたバイタルサイン測定、観察及び振り返り	(実演の準備・練習) ・学内実習での学びのまとめ	・個別面談

表 3. 2020年度 保育・教育関連施設の初版学内実習計画

学内実習内容	1 日目	2 日目	3 日目	4 日目
成長発達の理解 0 歳児	●			
成長発達の理解 1. 2 歳児	●			
成長発達の理解 3. 4. 5 歳児	●			
保育計画の立案			●	
保育計画の実施				●
応急処置対応			●	
発達に課題のある子どもと親の理解		●		

●：実習日を示す

でなく、日々の情報を更新した。これにより、日々の患者状況の変化を把握したアセスメントを行うことが可能となり、臨地実習での看護過程展開に近づけた。

また、実際の患児の状態変化を捉える経験を補うため、毎日の観察として、シミュレーターを用いたバイタルサイン測定を実施した。シミュレーターは受け持ち患児の発達段階を考慮し、乳幼児期の患児の場合は京都科学のバイタルサインベビーⅡ、学童期の患児の場合は Laerdal の Sim Junior を使用した。バイタルサイン測定の技術演習は、学生 2、3 名でグループを作成し、測定の実施者、患児役及び付き添いの家族役などを患者状況に合わせて交代で実施した。患児役及び家族役の学生には、患児からの質問や嫌がる反応、家族からの質問や不安の訴えなど、患児の状況を踏まえて臨床現場で起こり得る反応を教員が想定して作成したシナリオを、測定者に分からないように説明し、それに沿った言動を行った。実習序盤で、学生がうまくシナリオを表現できないときは、教員が先に実践することで、イメージ化を促した。学生自身で、それぞれの役割を担い、その振り返りから、患児及び家族の反応の意図や理由を考え、看護師自身が

それにどのように対応するか思考する機会を確保した。また、患児の実際の言動の理解について、実習初日に幼児期の社会性の発達及び運動機能の発達の DVD を視聴することで、発達の特徴に基づいた患児の言動の実際とその理由の理解についてイメージ化を図った。

前年度の学内実習でも実施した、家族看護専門看護師による講義は、2021 年度も継続し、臨床の看護師と関わる機会を確保した。また、事例に基づいた看護技術の準備・練習・実演についても継続して実施したが、シナリオを用いた観察の経験を活かして、学生が主体的に臨床での患児・家族の反応を考慮した設定ができるように思考を促した。

3. 保育・教育関連施設における実習構成

1) 2020 年度の実習構成

保育・教育関連施設実習では、実習目標に照らして、実習構成を「成長・発達の理解」「保育計画の立案」「保育計画の実施」「応急処置対応」「発達に課題のある子どもと親の理解」に区分した。表 3 に初回の計画を示した。

まず、初めに「成長・発達の理解」では、DVD 視聴

表4. 2020年度 保育・教育関連施設の変更した学内実習計画

学内実習内容	1日目	2日目	3日目	4日目
成長発達理解 0歳児	●			
成長発達理解 1.2歳児	●			
成長発達理解 3.4.5歳児	● →	○		
保育計画の立案		○ ←	●	
保育計画の実施			○ ←	●
応急処置対応			●	
発達に課題のある子どもと親の理解		● →		○

● : 実習日 →○ : 実習日の修正

で乳幼児の発達と保育を理解できるように0歳児, 1. 2歳児, 3. 4. 5歳児の3本を視聴し, その後に100分程度の振り返りを行った。学生は, DVD視聴で子どもの発達過程や関わり方について見たことにより, 子どもの反応や関わり方のイメージができた様子であった。「保育計画の立案」「保育計画の実施」は, 学生が子どもの成長・発達の理解を基に対象とする乳幼児の年齢を決めて, 日常生活援助もしくは遊びの援助計画をグループに分かれて立案し, ロールプレイを行った。ロールプレイの様子は, 互いに見学しあった。「保育計画の立案・実施」では, DVD視聴でとらえた子どものイメージを保育計画の立案やロールプレイを通して子どもとの関わり方について具体化する機会となっていた。

2点目に, 保育所・幼稚園でよく起きる「応急処置対応」として鼻出血と頭部外傷事例への対応を取り上げた。学生が園児・保育者または教諭, 園長等の役を担当し実演を行った。学生は, それぞれの役を担当するなかで子どもの心情や保育者としての対応の方法を学んでいた。また, 子どもの事故が日常的な行動や活動の中で偶発的に起こることも理解できていた。

3点目として「発達に課題のある子どもと親の理解」では, 「知的障害児施設での子どもの保育」のDVD視聴をした。このDVDは知的障害児施設での保育, その中に発達を促す取り組みや医師・理学療法士の支援と連携, 家族と共に子どもの発達を支援する様子を伝える内容である。視聴後振り返りを行い, 障がいのある子どもの成長と家族の気持ちに気づくことを目的とした。発達に課題のある子どもの理解では, 成長・発達の基本を押さえた上での学習であったため, 子どもの発達上の課題の理解や家族の理解もスムーズに進めることができたと思う。

学内実習進行において, 初期計画では「成長発達理解」を実習1日目に乳幼児期を行っていたが1年毎の著しく変化する乳幼児期の成長発達を学生が視覚だけで理

解するには限界があった。また, 成長・発達の理解が進んでいないなかで「発達に課題のある子どもと親の理解」を実習2日目に実施していたが, 家族の気持ちや障がいのある子どもの発達の課題に気づくまで学生の思考過程が追いついていない現状があり, 適切な構成ではなかったと思え学生の理解状況を鑑み, 実習進行途中での修正を行った。初期計画から表4に示したように実習2日目「成長・発達の理解」における3・4・5歳児の理解とし, 「成長・発達の理解」および「保育計画の立案・実施」が終了し基本を押さえた上で, 「発達に課題のある子どもと親の理解」を実習4日目へ後ろ倒しに計画修正を行ったことで, 学生の学習進度に合わせた展開へと繋がった。学生は, 子どもの発達上の課題が子どもの成長・発達にどのような影響や支援が必要であるか以前よりも深く理解することができていた。また, 上記の理解が進んだ上で子どもを育てる親の心情について聞くことにより, 親の心理的葛藤に共感できる姿勢が見られていた。計画修正をしたことで新たに, 子どもへの支援だけでなく家族も含んだ家族看護の視点にも視野を広げることができ既習学習との統合をする機会となっていた。

2) 2021年度の実習構成

2021年度の実習目的・目標は前年度と同じとした。学内実習構成も, 前年度と同じく「成長・発達の理解」「保育計画の立案」「保育計画の実施」「応急処置対応」「発達に課題のある子どもと親の理解」とし, 新たに「保育所・幼稚園機能の理解」の内容を追加した。保育所と幼稚園の違いを考える上で, 保育士・幼稚園教諭の仕事と役割について現場の保育士や幼稚園教諭の1日の様子で構成された2本のDVD視聴を入れた。2021年度の実習計画を表5に示す。

まず, 初めに「成長・発達の理解」では, 2020年度に使用した乳幼児期の3本のDVDに加え子どもの発達と支援全5巻(運動機能の発達, 情動の発達, 社会性の発達, ことばの発達, 認知・思考の発達)のDVD視聴

表5. 2021年度 保育・教育関連施設 学内実習計画

学内実習内容	1日目	2日目	3日目	4日目
成長発達の理解 0歳児	●			
成長発達の理解 1,2歳児	●			
成長発達の理解 3,4,5歳児		●		
成長発達の理解 運動機能、情動、社会性			○	
成長発達の理解 ことば、認知/思考				○
保育所・幼稚園機能の理解	○			
保育計画の立案	●	●		
保育計画の実施		●	●	
応急処置対応				●
発達に課題のある子どもと親の理解				●

●：実習日

○：本年度追加項目

と振り返りを行った。2020年度において、乳幼児期の発達のDVD視聴だけでは実習目的・目標に照らし合わせた際に不十分であったとの振り返りから、「保育計画の立案・実施」の後に子どもの発達と支援のDVDを視聴することにより理解を深められるよう再構成した。

2点目に「保育計画の立案」「保育計画の実施」では、成長・発達での理解をもとに日常生活援助もしくは遊びの援助計画を乳児および幼児で2つ立案し実施した。2020年度は、成長・発達段階のいずれかの年代を選択していたが、2021年度は0歳児～2歳児で1つ、3歳児～5歳児で1つの保育計画の立案および実施としてロールプレイに修正をしたことで、発達の連続性と関わり方の違いについて理解を深めることができていた。

3点目に「保育所・幼稚園機能の理解」を新たに取り入れることで保育所および幼稚園の対象となる園児や役割・機能など具体的に学ぶ機会を確保した。

4. 学内日のまとめ

学内実習の最終日は、同時期に臨地実習を行っていた学生と合同で実習経験の振り返り及び学習した内容の共有とまとめを行った。最初に、実習施設毎にグループワークを行った。医療施設実習後のグループには、①看護ケアの実施、②患児と家族との人間関係、③安全・安楽への援助、④健康問題や入院・入所が小児や家族に及ぼす影響、⑤療養環境、⑥感染予防、⑦多職種との連携、⑧健康の連続性の8つの視点を示し、これらの視点の中から2～3個を選択または組み合わせることで、実習での経験を系統的にまとめやすいよう配慮した。保育・教育関連施設実習後には、①保育・生活環境、②保育者の関わり方、③子どもの発達段階での行動の特徴(行動・言動・遊びなど)、④児童生徒の教育や生活環境、⑤教員の支援・指導、⑥保護者や地域との連携、⑦感染対策の7つの視

点を示して同様の振り返りを行った。

グループワーク終了後は、話し合った内容の発表会を行った。その際に、臨地実習を行ったグループが実習で経験した内容をできるだけ具体的に説明するように促し、学内実習となった学生に理解しやすく興味をもてるようにした。学生間での交流を促すことで、学内実習を行った学生から、臨地実習を行った学生へ実習状況に関する質問として、子どもと関わった際の具体的な反応の様子や、学内実習で学習した疾患と同じ疾患の子どもの言動などを積極的に尋ねている様子が見られていた。

V. 考察

1. 2021年度の修正点の効果と限界

1) 医療施設実習における患児の病状変化を意識できる授業設計の重要性

2021年度の学内実習内容として追加・修正した、教育用電子カルテを用いた看護過程の展開及び、患者の状態に関する情報を日々、追加・更新して情報収集を行うことで、2020年度の実習内容よりも、最新の情報を収集してから患児の状態を把握して、その日の行動を検討するという、一連の流れを円滑に実施することができた。さらに、教員が捉えた学生の様子から、前日の状態との比較をしたアセスメントの実施や、今後の変化を予測した援助計画の修正などをする様子が見られており、状態が変化することを捉えることで、臨床での患児の状態変化をイメージすることができたと考える。

また、シミュレーターを用いたバイタルサイン測定技術演習と、シナリオを使用した患児役及び付き添いの家族役などの実践については、当初はどのように役を演じて良いか戸惑う学生も見られたが、教員が手本を見せることや繰り返し交代で行うことにより、徐々に積極的に自分の考える役を演じるようになっていた。そのため、

患児・家族の反応を考慮する機会が確保できたと考える。しかし、患児の反応についてはDVD教材などで、実際の子どもの様子を確認することができる反面、家族の反応については、家族看護専門看護師の講義、及び臨地で実習した学生からの体験談の共有をおこなったものの、十分な理解に繋がらず、困難感が残った。COVID-19流行下での看護学実習について、模擬患者を利用したコミュニケーション演習の報告（松浦，2022）や病棟看護師のオンラインシステムを活用した実習（飯田ら，2022）など、様々な工夫が報告されている。特に、近年ではオンライン教育やXR（X Reality）などのデジタルトランスフォーメーション化が進んでおり、今後は家族と関わる経験が難しい場合にも、これらの技術を活用することでより現実味のある理解が可能になると考える。

また、臨地実習の場合、病棟及び病室の色使いなど子どもへの配慮をした工夫の実際、プレイルームの様子、患児・家族の私物が持ち込まれている病室の様子など、病棟環境から学習することが可能である。しかし、学内実習では学内の施設を使用するため、病棟の工夫について、特に病室環境などの詳細をイメージすることが困難であったと考える。実際に学生の行動から、ベッド周囲での立ち位置や物品を乗せたワゴンの配置などについては、限られた病室内のスペースを意識した位置取りができていない様子も見られていた。先行研究では、学内実習でのシナリオ・シミュレーションに実際の臨床指導者が参加し高性能のシミュレーターを使用することでリアリティのある環境設定が可能になることが報告されている（日高，2020）。今後は、学内の教育資源だけでなく、学内実習における実習施設との連携体制を検討する必要性が考えられた。

2) 保育・教育関連施設実習での発達の知識と実際を結びつける難しさ

保育・教育関連施設の学内実習における発達段階別の学習では、DVDの視聴後に、学生は映像でみた子どもの動作や行動などの発達を既習学習の知識と結びつけて捉えることが教員の想定よりもできなかった。矢野ら（2018）は、保育所実習から「子どもの成長発達の過程を子どもの保育の中で理解する」「子どもとのかかわり方について保育士を通して学んでいる」ことを学び、子どもを理解していったとしている。臨地実習では、時間をかけながら子どもの発達過程や関わり方を理解しており、2020年度途中の学内実習より、乳幼児期の発達段階の学習にかかる時間を1日から2日に増やした。教科

書等に戻り教員がファシリテートしながら、映像の子どもと既習学習の知識を結びつけることにより、発達段階別の理解について時間をかけながら段階的に深めることで意味づけをすることができた。また、子どもの現状に即した保育計画の立案・実施にも繋がっていると考えられる。

保育計画の立案・実施において2021年度は、実習1日目から保育計画の立案、実習2日目に保育計画の実施を行うことにより映像で見た子どもの保育計画をDVD視聴後すぐに立案する中で、発達段階や支援方法など映像を想起しやすく具体的に想定できるようになっていた。また、発達段階を変更して2回目の保育計画の立案・実施をする際には1回目に行った役割の経験を活かして、より現実の子どもの様子・反応や保育士の支援方法を立案し実演できており、よりリアリティある内容となったことと発達の連続性について学ぶ機会となり学習効果を上げることができた。加えて2021年度は、DVD視聴の追加を行い発達および支援について保育計画の立案・実施の後に視聴した。それにより、言葉の発達・認知理解の状況設定やそれにおける保育者の支援方法が適切であったかなど学生が計画した保育計画の支援の確かさなどを確認する機会となっていた。

学生は、子どもの映像と既習知識を結びつけて理解することに苦慮している。そこには、学生の子ども観において成長発達の連続性の認識が薄れ、一般的な理解に留まっていることも影響していると推察される。臨地実習をイメージしやすいように、学生の幼い頃の経験を出し合うことや子どもの内面世界を理解できるようにするなど、その時期の成長・発達の知識と結びつけられるよう学生の経験に即した、授業設計の必要性があると考えた。

2. 学内実習として工夫した点の演習への活用

今回、臨地実習の代替として構成した学内実習は、実際に患児・家族と関わるできていないことによる対象理解の困難はややあったものの、子どもの発達段階的特徴を捉えた関わり方や、健康障害をもつ小児とその家族への関わり方について考慮し、実践することができており、臨地実習と比較しても小児看護学実習の目標は概ね達成できる内容であった。特に、DVD等の視聴覚教材を使用したグループディスカッションや教育用電子カルテ及びシミュレーターを使用した技術演習については、学内演習として行うことで、臨地実習に臨む前よりも高いレベルでの準備が行えると考える。これにより、短期間で行われる小児看護学実習では、限られた経験か

らの学習の質の向上が期待される。

学び—記述からの分析—, 名寄市立大学コミュニティケア教育センター年報, Vol. 36 (2), 39-45.

VI. まとめ

2020年度から構成・検討した医療施設の代替の学内実習内容は、臨床現場における日々の状態変化や、患児・家族の反応を考慮する実際のケアなどを、臨地実習を経験できなかった学生が理解することにつながった。しかし、実際の家族の反応や小児病棟の特徴的な環境をイメージし、考慮するまでは、今回の学内実習構成では困難であった。

保育・教育関連施設の代替について、DVDなど映像の視聴では、学生は子どもの動作や行動を既習の知識と結びつけにくい面があることが再確認された。そのため視聴後に、教科書などを用いて、知識と映像の子どもの動きとを結びつける授業設計が必要であった。臨地を実感しやすいように学生の幼い時の経験を出し合い、その時期の成長発達知識と結びつけるなど、リアリティを持てる工夫の必要性が考えられた。

今後は、同様に学内実習を余儀なくされた場合での実施だけでなく、臨地実習前の演習への応用により、実際の患児への看護をイメージでき、実習ではより深い学びができると考えられる。

付記

本研究の内容の一部は、日本看護研究学会第48回学術集会にて発表した。

引用文献

- 日高艶子 (2020) : オンラインツール・オンデマンド教材を組み合わせた実習方法とリアリティを追求したシナリオ・シミュレーション, 看護展望, Vol. 45 (13), 15-19.
- 飯田尚美, 柘野浩子 (2022) : オンラインシステムを活用した混合型成人慢性期看護学実習における評価と課題 —学生レポートと満足度の分析から—, 日本看護科学学会 第42回日本看護科学学会学術集会 抄録, P2-131.
- 一般社団法人日本看護系大学協議会看護学教育向上委員会資料 (2020) : 2020年度 COVID-19に伴う看護学実習への影響調査結果.
- 松浦麻子, 蜂ヶ崎令子, 田中美穂他 (2022) : 基礎看護学臨地実習の代替としての模擬患者を対象としたコミュニケーション演習で学生が捉えた自身の傾向と課題, 日本看護科学学会 第42回日本看護科学学会学術集会 抄録, O43-05.
- 矢野芳美, 永谷智恵他 (2018) : 看護学生の保育所実習における